発行／熊本県農業者政治連盟　JA 熊本県会館内　熊本市南千反畑町２－３　電話 096-328-1284
編集責任者　木村　幸孝　発行／毎月１回　15 日発行　平成９年７月４日第三種郵便物許可

農政連だより

みどりの風

Noseiren Dayori　Midori no Kaze

4 月号
No.232

一房ダム（水上村：写真提供　熊本県）
「日本一の桜の里」水上村に位置する一房ダム湖の周辺には、数万本の桜並木があり、桜の咲く季節になると県内外から人々が訪れる。

主な内容

・第 12 回農政連リーダー農政研修会
・統一ブランドマークの策定
・JA あまくさ青壮年部活動報告
・ガンバッています：川崎眞志男さん、隈部雅子さん
・各連合会からのお知らせ

せせらぎ

三月五日、北朝鮮は、運搬ロケット「銀河二号」によって打ち上げられた試験通信衛星「光明星二号」を、軌道に乗せることに成功したと報じた。更にその衛星から、「金正日将軍の歌」などを地上にむけて送信しているという。

そして三月七日、「人工衛星」を搭載した三段式と見られるロケットの機体の映像を公開した。そして翌日には、北朝鮮の首都平城で、十万人を越える市民を集め、人工衛星成功歓迎大会を盛大に開催したことを報じている。

しかし、北米航空宇宙防衛司令部（ＮＯＲＡＤ）は、北朝鮮の衛星は軌道に乗らず、「２段目以降は太平洋に落下した。」と発表した。

北朝鮮は、発射に先立ち「人工衛星」の打ち上げとし、事前に国際機関に、「日時、危険海域」等を通告し、あくまでも衛星運搬ロケットとするが、ミサイル「テポドン二号」の改良型であり、ミサイルの発射実験であったことには間違いない。

今回の北朝鮮の行動に対し、国連安全保障理事会は、過去の決議違反に対する非難を求める日米と、慎重な対応をとろうとする中露とが対立を深めた。

そして、今後の６カ国協議の進展次第では、北朝鮮はその離脱さへ示唆している。これに対しアメリカ内部からも安保理での決議など「形式ばかりにこだわるべきではない。」との動きも出てきた。このため強い拘束力を持った「決議」よりも、緩やかな「声明」とすべきと、今後の展開は不透明だ。しかし日本にとっては、隣国の核の脅威こそが最大の問題である。

４月６日付新聞に、「北朝鮮ミサイル発射」の記事の燐面に、チェコのプラハで演説したオバマ米大統領の『「核兵器のない世界」に向けた具体的処置への宣言』が掲載されていた。ささやかな光明に期待したい。

第12回 農政連リーダー農政研修会を開催

3月9日、JA熊本教育センターで、農政連委員、総支部長、生産部会、青壮年部、女性部、JA・連合会役職員など約150名が参加して、農政連リーダー農政研修会を開催した。

▶JA熊本教育センターで開催

▶あいさつをする園田農政連委員長

研修会は、地元出身で07年2月まで共同通信社・論説委員長、07年4月から崇城大学教授井芹浩文氏、東京大学大学院教授（食料・農業・農村政策審議会委員）鈴木宣弘氏を招いてご講演いただき研さんを積んだ。

■〈井芹浩文氏〉

題目「麻生政権と総選挙のゆくえ」（要旨）

▼麻生政権の支持率が大きくダウンする中で、民主党の小沢代表の政治資金問題が発生して自民党、民主党ともに不安材料が露呈してきた。このような中で、衆議院の解散を考えるとき、一つ目は、21年度予算及び関連法案成立後の5月頃の解散、二つ目は、衆議院の9月任期満了の場合9月10日がタイムリミットであるので8月頃等々が予想される。

▼いずれにしてもこれからの衆議院選挙のゆくえは混沌としており、日本における今後の政局は先行き不透明でどのような事態になるか予想できない状況にある。途中、政治資金問題に絡んで田中角栄の逮捕時のエピソードなどを交えて面白く話された。

■〈鈴木宣弘氏〉

題目「国際交渉のゆくえと農業・農協の展開方向」（抜粋）

●WTO（国際交渉）

▼米国の穀物（コメ、コムギ、トウモロコシ、大豆等）、綿花の市場価格と目標価格との差額を補填する補助金は、WTO上は国内政策に分類されている。高関税によって輸入を締め出し、国内で手厚い価格支持を行えば必然的に過剰生産が生じるが、過剰分は補助金を付けてダンピング輸出されるため問題は解決する。

▼こうして本来ならオセアニアからの最大の輸入国になるはずのEUや米国は逆に輸出国になり得ている。

▼一方、我国は過剰生産が出ると生産調整を強化する選択肢しか持たない点で農業政策の体系がまったく違っている。

▼このように輸出国の「攻撃的保護」装置を放置して、日本のような輸入国が関税削減等を大幅に行うことはきわめてバランスを欠くので、安易な妥協はすべきではない。

●日本の農業・農村（食料自給率）

▼最近の国際穀物の需給の逼迫を受けてインド、ロシア、ベトナム等が自国の食料確保のためにコメ、小麦、トウモロコシ、大豆等の輸出規制を実施、EUもあれだけの域内統合を進めながらも、まず各国での一定の自給率の維持を重視している。

▼このような中、日本ほどグローバル化した食糧市場はなく、我々の体のエネルギーの60％もが海外の食料に依存しており、欧米諸国ほどには国産振興策が取られていないことが自給率低下の要因と考える。

▼そこで前述のように、各国が輸出量を簡単に減らすことを考えると日本のような輸入国もそれに対処して、ある程度の国内生産を常に確保しておく権利を主張する必要がある。

▼いわゆる食料の確保は、軍事、エネルギーと並んで国家存立の重要な3本柱の一つと考える。

▼食料貿易の自由化が進んで日本から農地が消え、すべての食料が海外から運ばれた場合、日本は製造業とサービス業の国になる。海外から食料として入ってくる窒素と国内の産業活動から排出される窒素量が、その窒素を最終的に受け入れていた農地や自然環境が減少しているため、日本の窒素需給は大幅な供給超過になる。

▼このようにWTO、FTAなど貿易自由化は、一部の輸出産業の短期的利益や安い食料と引き換えに国土や地域社会の荒廃、国家安全保障や人々の健康リスク等長期的に失うものが大きい。

▼そこで日本の生産者が目指

すべきは、地域資源循環型の農業に徹して、消費者に自然・安全・本物の農産物をという食にかかわる人間の基本的な使命に立ち返ることであり、生産者と消費者との絆の強化が急務である。

▼スイスの卵は一個60～80円もするが、20円の輸入物に負けていない。これを買うことで農家の皆さんの生活が支えられ、それによって自分たちの生活が支えられているのだから当たり前でしょうと、小学生の女の子の答えに意識の高さを見る。

▼可能な限りの具体的な指標を基に、消費者と生産者が「安さ」と引き換えに失うものの大きさを一緒に考える場をもっと作るべきである。

▼このまま行けば、農村を中心とする日本の地域経済が崩壊し国土が荒れ果てることになり、経済および農業サイドの利害のみで判断するのではなく国家全体の総合的判断が求められる。

▼そこで生命の維持に不可欠な食料をその生産過程も含めて最良の形で消費者に届けるという社会的使命に誠意を持って取組み、消費者がこれをしっかり受け止めてくれるシステムの強化が必要である。

▼日本農業・農村の崩壊、食料自給率の更なる低下を食い止めるには生産者と消費者との絆の強化が急務である。

▼国の補助金は、団体や組織に支払えても個別農家に支払いにくいという我国の予算執行上の問題も今後検討する必要がある。

▼また、水田のコメ生産機能は維持し可能な限り、輸入依存度の高いトウモロコシ、小麦等からコメへの代替に努めるとともに国内の主食用を国際的な援助にまわして今の生産調整から販売、出口での調整への移行を進める必要がある。

▼これからは、霞ヶ関や永田町が政策を決めるのではなく、消費者が支持してくれるかどうかの視点に立ち、現場が政策を決めなければ自給率向上に結びつく政策は実現しないと力説された。

▲面白く話をされる井芹浩文氏

▲熱弁をふるう鈴木宣弘氏

統一ブランドマークを策定

熊本県JAグループは、県下統一のブランドマークを策定、発表した。

農業をめぐる情勢は、市場規模の縮小、農村の高齢化、産地間競争、農産物の輸入拡大など厳しい環境にある。

そこで、熊本県JAグループでは、「熊本県の農畜産物」をより多くの消費者の方々に広くアピールし、安心と信頼の提供と販売強化のため、県下統一のブランドマークを策定。

披露式典において、上村幸男JA熊本経済連会長は「熊本農業の新たな旗印となる統一マークの下に生産者・組合員、JA組織が結集し、産地活性化につなげたい」と力を込めた挨拶をした。

統一マークは、1、937点の応募の中から東京在住の佐藤幸雄氏の作品が選ばれた。この県下統一ブランドマークは、出荷用のダンボール箱やTシャツなどに使用して一層の生産販売戦略やイメージアップ対策に活用して、首都圏をはじめ県下農畜産物の販売を強化する。併せて県内JAが一丸となった計画出荷や価格交渉などを行う青果物コントロールセンターとタイアップしながら、熊本産農畜産物の浸透をめざす。

▲応募作品の審査風景

◀ブランドマークのTシャツ

▲県下統一ブランドマーク

青壮年部活動報告

■ JA あまくさ ■

天草地方は、四方を海に囲まれた風光明媚な豊かな自然が残る地域です。天草地域は温暖な気候を活かした柑橘類の栽培に適しており、特に近年、施設デコポンの面積が増え、天草のデコポンは日本一の味と全国からの注目を浴びています。また早場米の産地としても知られており、管内で収穫される水稲の９割は早期米です。

天草にはＪＡあまくさ、ＪＡ本渡五和、ＪＡれいほくの３つのＪＡがあり、それぞれに青壮年部があります。他の地区と違うのは３ＪＡで天草郡市農協青壮年部協議会を組織し、各ＪＡの活動のほかに、３ＪＡ合同で盟友リーダー研修会、青壮年部＆女性部大会、スポーツ交流大会など様々な活動に取り組んでいます。

ＪＡあまくさ青壮年部（金棒和博部長）は、10支部１４０名の盟友が中心となり、高齢農家からの早期水稲の作業受託や施設ハウスのビニールの張り替え、管内の様々なイベントへの参加など、「地域に根ざした活動」を合い言葉に頑張っています。

また、今年度は地域の特産品を使った、青壮年部オリジナルの加工品の開発等も計画しており、地域に元気を与える活動を展開していきます。

「食と農」理解促進運動

田植えをしている子供たち（アグリキッズ）

青壮年部総会

販売会場でお客さんが殺到

ガンバッテいます

川崎　眞志男さん
ＪＡあまくさ農産部会長

■水稲栽培一筋

ＪＡあまくさの農産部会長川崎さんのお宅を訪問しました。

天草は二期作地帯であり、田植えの準備で忙しい中、取材に応じていただきました。

川崎さんは、昭和28年3月生まれ。文徳高校の建設科を卒業、東京に出て建設関係の仕事を3年、その後、ふるさとに魅力を感じて地元に戻り10・0haの水稲栽培一筋に精を出しています。

■自然農業への取組み

自然農法に共鳴し、20年以上実践しています。このＭＯＡ自然農法は、岡田茂吉が農薬や化学肥料にたよらず、生命体である土の持つ力を最大限に発揮させ、自然環境を清らかに保ちつつ、安全でおいしく生命力にみちた美しい作物の栽培を願って、昭和10年に創始した農法である。近年は多くの農家が取組んでいる環境保全型農業ですが、現在はこれをもう一歩進めて環境回復型農業を提唱しています。

■環境回復型農業へ

赤米、黒米、みどり米、米味噌などお米の生産から加工販売に取組んでいます。今、資材や化学肥料の価格が高騰し農家の経営を直撃していますが、この特殊な水を利用した農法であればバランスのとれた元気な作物ができることから虫もつきにくく、米のエネルギーが高く食味もよくなり、これを食べると人も元気になり、経費もある程度節減できます。「今年の米はなんでこんなにおいしいのか。ぜひ分けてもらえないか」と言われます。また、「メロンの糖度も19度と高く農家の人もこれは最高」と言ってくれます。

そこでＪＡあまくさを中心としてこの回復型農業の普及に奔走しています。「もっと普及すれば、この農法でできた米を新しいネーミングを付けて販売したい」と話されました。

■これからのＪＡへ

現在、ＪＡの農産部会長をしていますが、ＪＡの始まりは、協同で販売して協同で買うことから始まっています。この姿勢を基本として組合員が多いに利用するＪＡになるように、ＪＡも一層の努力を続けてほしい。

■好きな言葉

感謝。「回復型農業がもっと普及してみんなが元気になれるように、毎日を感謝の気持ちで取組んでいる」と笑顔で答えてくれました。

隈部　雅子さん
ＪＡ菊池　七城町フレッシュミズ

■「隈部牧場」のお嫁さん

隈部さんは、小さいころから体を動かすことや、動物が好きだったそうです。親の勧めで農業高校、そして農業大学校に進学しました。

二十代のころは、七城町の酪農家に住込みで働いていました。そこで現在のご主人と知り合い、結婚。

現在では二人の子供に恵まれ、祖母、両親と五人で暮らしています。

■酪農家になって

隈部さん宅では、搾乳牛百頭を飼育しており、通常の世話の他、お産にも立ち会います。「私が子供を出産して間もない頃に、牛の出産に立ち会いました。乳牛は産まれた子牛をすぐに母牛から引き離します。自分の出産の時との差に、悲しさと、申し訳なさを感じました。その時、牛は経済動物だと実感しました。」と、現場ならではの感想も。またこれからの農業についても、「この不況のため、農業に注目が集まっている。だからこそ『恥じない農業』、『納得する農業』、『食卓につながる農業』をやりたい。そして、生産者から消費者に届く様な農業をしたい。」と、語ってくれました。

■ＪＡ熊本県女性大会

三月十二日に開催されたＪＡ熊本県女性大会が開催されました。隈部さんは、その中の「フレッシュミズの主張コンクール」に出場。隈部さんのユニークな発表方法と軽快な語り口で、会場からはたびたび笑い声が上がりました。審査の結果、隈部さんが最優秀賞に選ばれ、「全国フレッシュミズの主張コンクール」にも原稿応募されるそうです。

■フレッシュミズでの活動

七城町フレッシュミズは、一時休止状態になりました。しかし、平成二十年度に活動を再開。現在は十五名の会員で構成されています。今では農業者にこだわらず、様々な職種の方々が所属。十二月に「親子でできる料理教室」を開き好評を得ました。

これからの主な活動として、毎月ではなく、三ヶ月に一度の集会を検討。そして徐々に活動内容を増やして、参加してみたいと思える様な活動を目指しています。また青年部との合同の活動も考えているとのこと。

「余裕ができれば、会員以外の方を誘いながら、いろいろな形で地域の方々と交流を深めていきたい。」

■今後の期待と抱負

隈部さんは今後の抱負として、「再結成して日が浅いですが、先達の背を見て、次代につなげる活動の輪を作っていきたい。」

隈部さんの熱意と復活した七城町フレッシュミズのこれからに期待です。

……JA中央会……

中央会・連合会臨時総会開く

JA熊本中央会、各連合会は3月30日、熊本市で臨時総会を開き、2009年度事業計画などを承認しました。

JA熊本中央会の園田俊宏会長は「食の安全・安心への取り組み、コンプライアンスの徹底、不良債権の解決等で、組合員・消費者から信頼されるJAとなり、統一ブランドマークと一体となってスピード感をもって進めたい」とあいさつしました。

中央会の事業計画では、基本的課題として、①農政課題への対応②第22回JA熊本県大会決議事項の着実な実践③信頼されるJA経営の確立④第23回JA熊本県大会に向けたJAグループ熊本の進むべき方向性の提起⑤JA・連合会からの期待に応えうる中央会機能の発揮を挙げました。

また、特別決議として、①所得の確保・経営安定対策の確立と万全な予算の確保②WTO農業交渉では新たな農産物貿易ルールの確立③生産調整メリットの充実と万全の経営安定対策の確立等、を採択しました。

信連は、農林中央金庫と完全統合を終え、3月31日で解散し、9月まで残余財産の清算業務が必要となるため、清算人の選任等を採択。

経済連は、①地域農業振興に向けた生産基盤の確立②販売事業改革を着実に実践し、くまもと農畜産物のブランド化を進める③生活関連事業を含めた協同活動の強化を図り、系統結集に取り組む等、

また厚生連は、①新たなJA健康管理活動の推進②信頼される健診活動と質の高いサービスの提供③事業推進体制の確立と経営基盤の強化を基本に取り組むことをそれぞれ挙げました。

▲あいさつする園田JA中央会会長

……JA経済連……

春夏瓜類・春野菜出荷大会

～満足と感動のJAブランドをめざして～

JA熊本経済連は3月12日、熊本市内で2009年産春夏瓜類・春野菜出荷大会と豊作祈願祭を開き、販売目標金額300億円（春夏瓜類120億円、春野菜180億円）の達成を誓いました。「熊本はひとつ」を合言葉に結集に向け、熊本の農畜産物の販売促進のシンボルであるくまもと農畜産物統一ブランドマークを広く周知し、満足と感動のJAブランドを目指していきます。

同経済連の上村幸男会長が「販売戦略の再構築の旗印として県統一ブランドマークを位置づけ、活用し、熊本農業のイメージアップを図りたい。また、青果物コントロールセンターを核として、産地一体となり、JA枠を超えた総合力を発揮していきたい」と力を込めました。また、統一マークの披露も併せて行いました。

2009年産の生産計画（3～6月）は春夏瓜類の作付面積が1455・8㌶（前年対比96％）出荷量が4万6119・7㌧（同96％）。春野菜の作付面積は2573・4㌶（同99％）、出荷量は6万3036・1㌧（同101％）。

同経済連によると、「瓜類・野菜ともに低温・日照不足の影響による、生育遅れがみられるが、天候の回復もあり、順調な生育状況をたどるとみられる。瓜類については、大玉すいかの作付面積の減少が見られる中、小玉すいかは前年対比119％の作付面積であり、小玉への移行が見られる。春野菜については、主力品目のトマト類、また、国産志向の中、ショウガ、エンドウ等の作付面積が増加している」とのこと。

大会では生産・販売の取り組みで「責任と自信をこめた商品の提供」「情報の共有化による安定供給体制の確立」「多様な流通に対応できる生産・販売システムの充実」「消費者視点に立ち実需者に支持される売場づくり」「『くまもとブランド』の発信と販促支援強化」の5つの基本方針が報告。

また、消費地での多くの広報サポーターの中から、熊本県の名誉大使である、前熊本県知事潮谷義子さんや八代亜紀さんなど、熊本県出身の有名人からビデオレターによる応援メッセージが届けられました。

▶販売目標金額300億円の達成を誓った春夏瓜類・春野菜出荷大会

……JA共済連……

21年度　JA共済キャンペーン始まりました。

～ずっとサンキューキャンペーン～

JA共済では、創立以来、みなさまに「お会いすること」を最も大切にしています。21年度も、組合員・利用者の方々一人ひとりのニーズに即したきめ細かな保障提供を目指して、全戸訪問活動「3Q訪問プロジェクト」に取り組んでいきます。

ご自身やご家族の保障について気になること、ご不明・ご心配なことなど、JA職員がお伺いしアドバイスいたします。新しい安心は新しい出会いから…。どうぞお気軽にお尋ねください。

あわせて、日頃の感謝をかたちに。「ずっとサンキューキャンペーン」を実施しています。アンケートに答えてご応募いただくと、仲間由紀恵セレクションオリジナルケース付き「ニンテンドーDSi」やアンパンマン賞にJA共済オリジナル「アンパンマンぴかぴか洗顔セット」「アンパンマン仲良しキッチンセット」などを抽選で156,000名様にプレゼントいたします。

詳しくは、JA窓口でお尋ねください。JA共済ホームページからもご応募できます。

また、これまでJA共済のご契約がない方をご紹介いただき、その方がご成約された場合、ご紹介くださったみなさまに、JA共済オリジナル 仲間由紀恵と坂口憲二のQUOカードを先着20,000名様にお贈りします。新しい仲間づくりにどうぞご協力ください。

JA共済では、創立以来、みなさまに「お会いすること」を最も大切にしています。 09481050108

「笑味（えみ）ちゃん」をご存知ですか？

JAグループでは、安全・安心な国産農畜産物の提供に向けたJAの取り組み姿勢をお示しするとともに、食のあり方や食料自給率の向上をアピールするため、「食は、日本の未来。」をテーマに「みんなのよい食プロジェクト」を展開しています。

そのシンボルマーク「笑味ちゃん」は、漢字の「食」という字をモチーフにして、よい食を笑顔で食べている姿に見立てています。名前は、一般の方からの公募で決まりました。また、食欲の増進、おいしさ、活動力を表す赤と、黒を組み合わせた、国産を意識した日本的な配色にしています。

そのかわいいキャラクターは、JAグループはもとより、一般の方からも人気です。総務省の鳩山邦夫大臣も、背広のえりに着けてくださっています。国会答弁などで、笑味ちゃんバッジが画面の隅に登場しているんですよ。

また、2月24、25日に東京・六本木ヒルズで開催された第3回JAグループ国産農畜産物商談会において、本プロジェクトのイメージカラーである赤で彩られた「よい食」ブースを出展しました。そのブースの前で全国連が一体となって、街頭宣伝も行いました。会場に来場されていた量販店、小売店等の多くの方々に関心を持っていただけました。

「よい食クイズ」

Q．日本で稲作が始まったのは約500年前

ウソ？　ホント？

あとがき

●〝花の王〟と呼ばれる牡丹は、豪華な花姿を楽しませてくれます。

四月に咲く花【牡丹】

牡丹の名の由来は、赤い花が一番いいとされていたが、種子から育てると同じ色が咲かないので、接木によって増やされたので牡とみなされ、牡（おす）丹（赤色）の名前になっている。

「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」と美しい女性をたとえて使われるが、婦人病の症状を表しており、いずれも根を生薬として使われた。

（花ことば）恥じらい

ボタン科　落葉小低木　中国

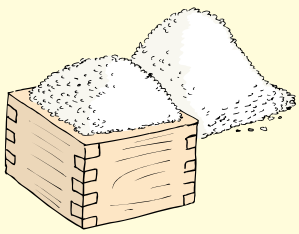
●盟友の皆様のご意見や　周辺地域の話題、写真等、各地区の総支部・支部（JA本・支所）へお寄せいただければ幸甚に存じます。

連絡先　熊本県農政連
電　話０９６－３２８－１２８４
ＦＡＸ０９６－３２６－５８０７

【よい食クイズ】

答え：ウソ

日本で稲作が始まったのは、約２５００年前！

稲作が始まったのは、さまざまな説があるけど今から約７０００年前の中国の長江（揚子江）中・下流域だという説が有力だよ。その後日本に伝わったのは、今から約２５００年前の縄文時代後期だと考えられているよ。大昔から、日本人は米を食べていたんだね。

ＪＡ全中発行「ごはんぢゃワンのお米クイズ生活編」より転載